

〔４〕発音指導のねらいと留意事項

1. 発音の指導は、発音練習のときだけでなく、実は、会話の例文や練習部分の指導をするときにも行われるべきである。発音練習の部分は、発音の練習に集中するために用意されたものである。
2. 教科書に盛り込んである練習は、中国語話者にとって、習得の困難な発音が中心になっている。しかし、学習者には、個々の問題点があるもので、教授者はそれら個別の問題点を矯正指導するための準備をしなければならない。
3. 発音の練習は、毎日少しずつ繰り返すことが望ましい。3分～10分ぐらいがよいだろう。
4. なかなか矯正できない間違いは、音声学的な説明が役に立つ。
5. ある音の発音がうまくできないときは、こだわりすぎると学習意欲を阻害することがある。適当に練習を切り上げ、翌日に持ち越すなどねばり強い指導が必要である。
6. 発音練習の材料は、各課に配置してあるが、それにとらわれることはない。習得の難しい練習材料は繰り返し行ってよい。

課	ね ら い	留 意 事 項
第 1 課	(1)母音の識別：特に「ア」と「エ」「イ」を中心に。 (2)拍感覚の習得（日本語では、一つ一つの音節の長さが重要であることを分からせる。）：四音節の基本的なアクセント形を利用して（接続音利用）。	(1)一音節の中で高さが移動しないように。 (2)母音の持続時間。 (3)応用練習の一、二音節間の高さの差は、意図的に用意してある。一つ一つの語の意味は覚える必要はない。
第 2 課	(1)母音の識別（続）：「ア」と「オ」「ウ」を中心に。 (2)拍感覚の習得：第 1 課と同様。	第 1 課と同じ点に留意するが、同時に「オ」と「ウ」の音の識別に注意する。「オ」を発音するときの唇のまるめ方がポイントになる。
第 3 課	(1)「ん」の音節としての独立性の習得。 (2)「ん」の異音の識別と習得。	(1)アンエンと「ア」と「ン」で、一かまたまりで発音させない。 (2)母音や摩擦音の前の「ン」を [ŋ] や [n] にさせない。口の中で、舌が歯茎や口蓋についてないか確かめるとよい。

第4課	第3課と同様。	
第5課	有声音、無声音、無気音の識別。	(1)日本語での有声子音と無声子音の区別の重要性を意識させる。「パ」と「バ」、「タ」と「ダ」、「カ」と「ガ」などが、異なった音であることを理解することは、中国語の話者にとっては極めて困難なことである。根気よく指導してほしい。 (2)日本語の無声子音、有声子音とも単独あるいは語頭では有気性が強く、語中では弱いことを確認させる。「パパ」「ババ」「タタ」「ダダ」「カカ」「ガガ」などの初めの音と二つ目の音では、息の出し方が違い、学習者にとっては気になることであることに注意してほしい。
第6課	第5課と同様。	
第7課	(1)拗音の調音法の習得。 (2)発音の練習を単語だけにしているは不十分で、文の中ででもきちんとと言えるようにしなければならないことを意識させる。 (3)昇調のイントネーションを習得。	「きゃ」「しゃ」などの子音以外の部分の発音を、多少変だけどよいだろうなどといまいなまま終えないこと。うまくできないときは「イ」「キ」「シ」「チ」「ニ」「ヒ」「ミ」「リ」の音にもどって、きちんと練習させること。
第8課	第7課と同様。	
第9課	(1)促音の調音法の習得。 (2)非昇調のイントネーションの習得。	破裂音などの子音が強くなりすぎないように「っ」の部分の音が次音の調音法と深い関係があることを知らせる。例えば、「りっとお」の「っ」の部分が発音するときには、次の音「と」の始まりのときの口のかまえ——舌先が歯茎についている——になっていることを知らせよう。また、「とお」の部分の長さにも十分注意させる。

第10課	第9課と同様。	例文を使って練習するとき、「っ」が連続するので習得はより困難になるが、急がせないでゆっくり、「っ」の部分も十分時間をかけて発音しても文全体としてバランスがとれていればよいことを指導したい。
第11課	拗音と母音連続を含むもので、拍感覚を再確認する。	切れ切れに発音しないで、なめらかに発音するように。教授者のモデルも文節ごとに切ったりして与えないように注意する。
第12課	有声音、無声音の再確認。	よくできないときには、この回だけではなく、毎回少しずつでも繰り返すことが望ましい。
第13課	第12課と同様。(有声音、無声音の続き)	
第14課	拍感覚の再確認。	長音で違う語になることを確認すること。
第15課	促音の調音法の再確認。	語中の「て」「た」など無声子音だけであるから、有声化がおこらないようにきびしくチェックする。
第16課	拗音調音法の再確認	直音と対比させて拗音の特徴をつかませる。
第17課	ラ行子音の調音法習得。	ここではナ行子音と対比させてある。他の子音(ダ行など)と紛らわしい発音をする場合もあるが、その場合は紛らわしい音と対比して練習させたい。
第18課	有声音、無声音の調音法の再々確認。	全部の語例についてできなくても、できた例について「それがよい」と自信を与えるようにしたい。

第19課	アクセントの基本型（潜在型）を与え、個々の音の再確認をする。	アナウンサーや俳優が、練習に使っている材料と同じものである。一つ一つを明瞭に、しかし、ぶつぶつ切らないようにしたい。
第20課	第19課と同様。	
第21課	第19課と同様だが、母音、摩擦音の前の「ん」の音も含む。	

言葉の調子（イントネーション）について

〔ベンキョー〕（勉強）を〔ペンギョー〕のように発音したり、〔ガッコー〕（学校）を〔カゴ〕と聞こえるように言ったりするのは、言葉の意味を取り違える原因になる。日本語の発音の仕方が会得できないために起こる失敗である。〔アメ〕や〔アメ〕のような音の高さで言葉を区別するアクセントの問題もあるが、生活上のコミュニケーションという観点からみると、イントネーションは、人間関係に摩擦を生じさせる原因となる点で、発音やアクセントの問題以上に重要な事柄である。

一つの文を口から発するとき、その文の中には、必ず文全体として高い部分や低い部分、あるいは強い部分、弱い部分ができる。そして、その高さや強さの変化の中に、話し手の相手に対する心の態度が示され、好意や怒り、喜びや悲しみが表される。

〔ソーデスカ〕と文末が上がれば、疑問や相手への積極的な働きかけを、〔ソーデスカ〕と、初めが高く、文末が低く下がれば、同意や納得を、さらに高さの差がひどくなれば驚きや詠嘆を示す。相手の話に意味がないという気持ちも音の高さの差を小さくし、「か」の部分を長めにしたりすることによって表される。

学習者が中国語の音調で日本語を話すときには、日本人にとって、相手を見殺したイントネーション、ぎこちない印象を与えるイントネーションなど、日本人に誤解を与える言葉の調子がよく現れる。音の高さ、強さ、長さに注意して指導者自身のイントネーションを観察する習慣を指導者はまず身に付け、学習者の不利益とならないイントネーションを習得させるべきであろう。